

接触場面における日本語－英語間の コードスイッチングに関する実証的研究 －理工系大学院の日本人学生と留学生の グループディスカッションの分析を通して－

田崎 敦子

学位取得年月：平成 20 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】 共生言語、多言語多文化社会、コミュニケーション・ストラテジー

【要旨】

理工系大学院では、英語で研究活動を行う留学生が多く、概して日本語能力の低い彼らは、日本語と英語を混せて日本人学生と意思の疎通を図っていると言われている。本研究では、こうした留学生と日本人学生が二言語を使いどのようにコミュニケーションを構築しているのかを示すことにより、英語と共に日本語を使い日本語母語話者と共に社会的活動を行う日本語非母語話者に対する日本語教育への示唆を得ることを目的とする。

本研究では、多様な留学生の日本語能力に対応するために、2つの接触場面(日本人学生+留学生)のグループディスカッションを対象に、CS を分析した。ひとつは、日本語をベース言語にできる能力を有するが、日本語で複雑な内容を取り上げることはできない留学生が参加する場面(相手言語接触場面)、もうひとつは、日本語能力が低く、英語をベース言語とする留学生が参加する場面(第三者言語接触場面)である。

まず、CS がどのように日本人学生と留学生の相互理解を促進するかという観点から、2つの接触場面について、統語面、機能面から CS を分析し、その機能がグループディスカッションの促進に及ぼす影響を探った。その結果、相手言語接触場面では、日本人学生、留学生双方がベース言語である日本語の枠組みを維持したまま英語への CS を採り入れ、その CS がコミュニケーション上の様々な機能を果たし、グループディスカッションの促進に寄与することがわかった(研究 1)。英語への CS の機能の中でも、特にコミュニケーション・ストラテジーとしての CS は、時間をかけずに留学生の日本語能力を補い、両者のコミュニケーションへの対等な参加を促す効果的な手段であることが示唆された。ただし、日本人学生と留学生が CS を使い相互理解を達成させるためには、互いに日本語能力、英語能力を配慮しながら、CS を協働的にコミュニケーションに採り入れる必要があることが指摘された(研究 2)。

第三者言語接触場面では、留学生の日本語能力が初級レベルであったにもかかわらず、日本人学生、留学生の双方が協働で CS を採り入れることにより、相互理解や、同じ大学院の学生としてのアイデンティティの構築、他者への配慮などが行われていることが示された(研究 3)。

さらに、CS が 2つの接触場面の相互行為に与える影響を探ったところ、どちらの場面においても、CS を使うことで参加者の役割が「日本語母語話者」「日本語非母語話者」、また「英語非母語話者」に固定されず、言語使用の面でより対等な参加が促されていること、特に、日本語がベース言語の場面では、英語への CS が留学生の参加を助け、英語がベース言語の場面では、日本語への CS が日本人学生の参加を助けており、それぞれの場面で CS が相互行為の促進していることが明らかになった(研究 4)。

これらの研究の結果から、日本語－英語間の CS は、日本語のみでは意思の疎通が難しい日本語母語話者と非母語話者の相互理解、相互行為を促す手段であると同時に、両者が互いに言語能力を配慮しながらコミュニケーションを進めるといふ共生のためのスキルを学ぶ手段となり得ることがわかった。また、日本語学習過程で CS を使い母語話者と社会的営みを行う学習者のインタラクション能力養成には、本研究で得られたような英語と共に使う日本語の役割、働きを採り入れることの必要性が示唆された。

(たさき あつこ)